

地域支援を行う保護者として療育 で大切にしてほしいこと

日置 真世

1

自己紹介

3つのアイデンティティ

①**当事者としての自分**:レット症候群の長女(31歳) 1歳半健診後にフォローとなり、2歳前に療育相談にて遅れを指摘されて、療育につながる。当時の肢体不自由児通園施設に母子通園すること4年(下の妹たちも連れて)、養護学校(小、中、高)を経て、フルで福祉サービスを利用しながら在宅生活を継続、+ASDでとても気難しく、思春期に二次障害を発症した次女(29歳)と唯一定型発達の三女(26歳)の子育ての経験

②**インフォーマルソーシャルワーカーとしての自分**:フォーマルSW時代(2008~2011年までSSW)をきっかけに出会い始めてしまった、子ども時代を奪われた若者たち

→どんな子どもにも「豊かな子ども時代を保障する」ことが療育の本質なのでは?障がいだけでなく、環境的なハンディキャップにも同じように保障すべき(ケースワークも、グループワークも、そしてコミュニティワークも!)

③**研究者・活動家としての自分**:大切なことを理論化して、発信する、自分だけではなく、共に発信する仲間(特に当事者)を増やす

2

私の療育の原体験

自分の思いを受け止められなかったこと
普通はこう思うはずだと決めつけられたこと
自分の子育てを否定されたこと

その裏には、発達が遅れがある長女のことを改善が必要なよくないものだ
ジャッジされていることを感じていたのかも(健診や相談、療育の場で感じ
取った「ひっかかった感」「気の毒、同情される感」「持ち上げられる感」)
→親の会活動や親同士ではなかったもの

3

若者たちとの活動を通じて学んだこと

- ・大切なことは、本人に聞くこと、相談すること(本人置き去りの支援はあるある)
- ・支援という機会を通じて、社会と自分自身と向き合う仲間になること
- ・支援者はいつも優位な立場にいることを自覚する(社会的優位性がある)
 - 正しいことや望ましいことがいつもできるわけではない
 - いくら自覚しても、高いところ、安全なところから物を見ている、伝えている
- ・支援より先に、権利保障ができるかどうか(ソーシャルワークの視点が必須)
 - 土台を保障せずに、正論を語るのは何の効果もない

最近、付き合いの長い若者から「同盟関係づくりがうまい」と評されたけれど、それが私が経験からたどり着いた一つの方法なのかもしれない

4

大切にしてほしいこと ナラティブを尊重すること

超気難しく、生きづらい次女がたどり着いた「ナラティブ理論」が療育(だけでなく、対人援助に全般)で大切なことに気づいた

私の原体験は自分が体験した「ナラティブへのダメージ」だった！

ナラティブ=感じたこと、考えたこと、自分が自分であるという感覚

ナラティブとして見えるのは「自己表現」(感情表出、しぐさ、言葉、行動など)

「感じたこと」「考えたこと」そして、「あなたがあなたであること」

まずは受け止めて、共に過ごす、共に生きていくために一緒に考えたいことがあれば、「私は、こう感じる」「私は、こう考える」「あくまでも、私は私で、あなたはあなただけど、一緒に考えたい」というメッセージを伝えて、さらに必要があれば相手と交渉をすること(できるだけフェアに伝える)